



## あなたを待っている

ヤシの木が生い茂り、照りつける太陽と海の青さから、かつてここで戦争があつたなんて、今の僕らには知るよしもない。だがしかし、あの老婆の一言が、私が日本人であることを思い出させ、今も心の隅で何かを締め付けられるしこりを残している。

南の海は好き。釣り人短絡的な発想で話をすれば、そこには魚がいっぱいいるからという安易な考え。都会の雑多の中で日々の生活を過ごす僕らにとつて、南の無人島で過ごすことは、とても貴重な時間である。

日本から真南へ赤道に近いところまで降ると、トラック諸島と呼ばれるミクロネシア共和国の二部がある。今はチュックと名前を変えたが、かつての第二次世界大戦で日本の占領下に置かれ、島の名は春・夏・秋・冬島と呼ばれた島々が集まっている。

僕ら仲間が心を癒すために年に数度訪れていた無人島は、本島のモエン（春島）島から程なく離れ、東西へ2キロほど伸びたファロスという島。この島は東西には伸びているものの、南北へはわずか100メートル足らずしかなく、タイフーンが来ればひとたまりもない大きさ。バンガローと呼ぶにはおこがましいバラック小屋に寝泊まりし、水や電気などは全くない。食料はモエン島を離れる際に必要なものを買って揃え、煮炊きをしてくれる人足と二緒に乗り込むという寸法だ。風呂はスコール、トイレは海。灯油ランプの光でひと晩中仲間と語り明かし、日が出れば島のリーフからのキヤステイキングで五目釣り。お昼になればビールを煽り、ハンモックでゴロン。日が傾けばフライロッドを振り回し、釣りに明け暮れる。獲物の何匹かは夕食のごちそうにしてみたい、ヤシの葉の隙間から覗く満点の星空に、夜空の明るさを知る。

島の時間はいつだってお日様と二緒。思い思いの場所を過ごす仲間達も、太陽が沈む頃に戻ってくる。

「どっつ？今日は釣れたの？」

「いや、今日はダメ。」と私。

この島の持ち主である、インターバーさんは流ちょうな日本語で話しかけてくる。彼女は、久しぶりに日本人との会話を楽しんでいるかのようだ。僕らがこの島へ来ると聞くと、わざわざ料理の腕を振るうために、一緒に島へ渡ってくる。

僕らが今夜のおかずを取ってこないことを知ると、彼女は天蚕糸の先に鉤の付いた素朴な仕掛けを持ち出してきて、フックに夕べの残り物を絡めつけると、海へ向かってヒョイと投げ込む。そうして糸を垂れて夕日でも眺めようか、という間もなく、獲物はすぐにかかる豊かな場所。

「あんなたちダメね、魚はこうやって釣るのよ。」  
「年齢を重ねたシワ顔に笑みを浮かべて僕らに語りかける彼女。」



こうしてその夜も新鮮な魚とともに、炎を囲んで仲間との語らいが始まった。しかし、すでに島へきて数日が経ち魚の話も飽きたし何か話題をと、インターバーさんに昔の事を語ってもらった。春島の頂上付近にある、ナパロンの要塞のような大きな砲台のこと。山本イソロクがこの海で死んだこと。この島にも慰霊碑があること、日本語は占領下時代に教わったこと、などなど。

「インターバーさんはいくつの時結婚したの？」

と、私が訪ねた。すると彼女は、遠くを見つめながら語り出した。

「私はね、二十歳で結婚したの。相手はね広島出身の日本人。ダンナサマとは恋愛結婚なのよ。子供ができ、幸せに暮らしていたのだけれど、ダンナサマは日本へ帰らなくちゃいけなくなり、返ったの。やがて子供も大きくなり、子供達がダンナサマの事を心配ししてくれたわ。」

だから私の子供達は日本へお父さんを探しに行ってくれたの。日本って大きいね。広島に行けばすぐにわかると思ったのだけれど、だめだったの。でもね、ダンナサマは必ず帰ってくると約束したの。何かの事情があつて帰れないのよ。私ダンナサマが帰ってくるまでいつまでも待っているわ。」

まもなく戦後50年を迎えるこの年。私の言葉は喉に何かが詰まったかのように、言葉が出てこなくなつてしまった。

先日、パールハーバーがあるオアフ島の釣行で、島の住民に関西訛りで話しかけられた時、ふとインターバーさんのことを思い出した。彼女は元気であるのだろうか。おしゃべりな住民の話をもよおし、見上げた空にはトラックと同じ青が広がっていた。

